

畠 古 墳

2016年

岡山県赤磐市教育委員会

序

本書は、平成26年度に実施した岡山県赤磐市弥上に所在する畠古墳の測量成果を収載しています。この弥上地区周辺は、現在でも数多くの遺跡が残されており、特に市内を代表する横穴式石室が数多く存在する地域として注目を集めています。畠古墳はそのうちのひとつで、かつて、岡山大学考古学研究室により調査が行われましたが、ここで出土した陶棺は県内でも古い段階に属するものとして貴重で、学術上高い評価を得ています。

このように重要な畠古墳ですが、これまで墳丘および横穴式石室の測量は実施されておりませんでした。この度、畠古墳の墳丘保護の一環として、測量調査を実施することにいたしました。その結果、横穴式石室は大変良好に保存されていることが判明しました。

この測量調査成果を収めた本書が、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば幸いです。測量調査の実施にあたりましては、土地所有者ならびに関係者から多大な御支援と御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

赤磐市教育委員会
教育長 杉山 高志

例　　言

- 1 本書は、烟古墳の墳丘および横穴式石室の測量調査報告書である。
- 2 烟古墳は岡山県赤磐市弥上322ほかに所在する。
- 3 測量調査は平成26年4月9日から5月30日の間の延べ12日間にわたり、赤磐市教育委員会が実施した。
- 4 測量調査は、金田善敬・有賀祐史が実施した。
- 5 測量調査にあたっては土地所有者の多大なる協力を得た。また、調査全般にわたり、岡山県教育文化財課、赤磐市文化財保護委員会から指導および助言を得た。
- 6 本書の編集・執筆は、金田が行った。
- 7 本報告書に掲載した実測図・写真等は赤磐市教育委員会(岡山県赤磐市下市337)に保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高さは、墳頂部を0mとしたものである。方位は方位磁石による。
- 2 本書に掲載した地図のうち、図1は国土地理院発行の1/25,000地形図「万富」を複製・加筆したものである。
- 3 横穴式石室の左右は、入口から見ての左右である。よって、本古墳の横穴式石室は、入口から奥壁を見て、右側に袖部をもっているので、本書では右片袖式石室と呼称する。

目　　次

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的歴史的環境	1
第2章 測量調査に至る経緯	3
第3章 測量調査の成果	4
第4章 まとめ	8
報告書抄録	11
国版	

図 目 次

図1 烟古墳の位置と周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)	2
図2 墳丘測量図 (1/200)	4
図3 横穴式石室平面図 (1/80)	6
図4 石室天井見上げ図 (1/50)	7
図5 烟古墳（左）と弥上古墳の横穴式石室の比較	8

表 目 次

表1 文化財保護法に基づく提出書類	3
-------------------------	---

写真目次

写真1 横穴式石室入口（西から）	3
写真2 墳丘の残存状況（東から）	3

図版目次

図版1

- 1 烟古墳遠景（西から）
- 2 烟古墳全景（北西から）
- 3 横穴式石室玄室（西から）

図版2

- 1 横穴式石室奥壁（西から）
- 2 横穴式石室玄室天井石（東から）
- 3 横穴式石室玄門付近天井石（東から）

図版3

- 1 横穴式石室玄門付近（東から）
- 2 横穴式石室左側壁（西から）
- 3 横穴式石室右側壁（西から）

図版4

- 1 横穴式石室袖石（東から）
- 2 横穴式石室漢道左側壁（西から）
- 3 横穴式石室入口付近（西から）

第1章 地理的歴史的環境

畠古墳は赤磐市弥上322ほかに所在する。弥上地区は現在赤磐市に属しているが、平成の合併前までは熊山町に含まれていた。その旧熊山町は域内の中央に県内三大河川のひとつである吉井川が流れているが、弥上地区はその支流である小野田川にそそぐ可真川の上流域に位置する。北側に開けた谷部で、東・南には大盛山・大森山など標高200~300m級の山々が、西には標高100m以下の日古木丘陵が存在している。

旧熊山町では松木遺跡で縄文時代の土器や石器が採集されており、この時代から人々の生活痕跡がみられる。この時期の遺構として、岡遺跡では縄文時代と推定される落とし穴が確認されている（柳瀬・下澤ほか2004）。また、岡山市ではあるが東区瀬戸町鍛冶屋D遺跡では自然流路から縄文時代後期・晚期の土器、石器などが多数発見されている（平井・山磨ほか2009）。

弥生時代になると遺跡数もふえ、丘陵上を中心に住居や墓地などの遺構が確認されている。発掘されたもので主な遺跡をあげると、弥生時代中期から後期にかけての集落であった岡遺跡（柳瀬・下澤ほか2004）、後期前半という限られた時期に営まれた佐古遺跡（内藤ほか2003）、100基をこえる土坑墓や土器棺墓が検出された前内池遺跡（内藤ほか2003）、弥生時代後期を中心とする集落に加え、墳丘墓が発見された谷の前遺跡（山磨・浅倉・重根ほか2005）などがある。そのうち、谷の前遺跡の墳丘墓は、理葬施設として土坑墓5基と土器棺墓1基が検出されており、幅の狭い尾根に直交した溝で区画し、長方形に列石を巡らした弥生時代後期後葉の遺構である。旧熊山町内では、弥生墳丘墓としてほかに丸崎4号墓があげられる。墳頂部に2基の土坑をもつ一辺約12.5mの方形で、特殊器台と特殊壺が出土している（高畠・光永1987）。

古墳時代の集落遺跡について、旧熊山町内では良好な遺跡は確認されていないが、古墳が多く築造されていることから、人々の営みをうかがうことができる。なかでも弥上地区や隣接する可真地区は岡山県内でも著名な横穴式石室墳が集中する地域として知られている（間壁2003）。小丸山古墳（可真丸山古墳）は、畠古墳と同一丘陵上に立地する前方後円墳（墳長約33m）であったが、明治30年に道路改修工事のため墳丘が縱断され、破壊された横穴式石室から数多くの遺物が出土した（荒木1940）。弥上古墳は岡山市東区瀬戸町に抜ける尾坂峠の北斜面上に位置する墳長約30mの前方後円墳で、後円部に西側に開口する横穴式石室を有している。石室内から陶棺や木棺痕跡が確認され、須恵器、土師器、馬具、武具、装身具など多くの遺物が検出された（山磨1986）。近年では、横穴式石室のほかに、竪穴式石室をも有する婦木路古墳群（柴田ほか2010）の調査も行われており、この地区における古墳の様相が明らかになってきている。

なお、弥上・可真地区周辺の後期古墳の特徴として理葬施設に陶棺を伴う例の多いことがあげられる。また、円筒埴輪のほかに県内でも類例の少ない人物埴輪の出土例が目立つことも注目される（間壁2003）。これに関して、可真上の土井遺跡で、古墳時代後期の陶棺や埴輪を焼成した窯が確認されたことは注目される（山磨・浅倉・重根ほか2005）。報告によると、畠古墳の陶棺はこの土井遺跡で焼成された可能性が高いと分析している。この地域周辺には、この他にも時期は異なるが、須恵器や瓦を焼成していた窯が発見されているほか、近辺には製鉄遺跡や鉄滓を出土する遺跡もあり、この地域が備前

地域において重要な生産拠点であったことは確実である。古墳時代後期におけるこの地域の隆盛の背景には、このような経済的な活動基盤があったことが分かる。

古代において備前国は、和銅6(713)年に備前6郡を割いて美作国が置かれたのちは、邑久・赤坂・上道・御野・津高・鬼島の6郡となっている。弥上地区は河磨郷⁽¹⁾に属するとされ、所属する郡名も赤坂郡から藤原(のち藤野)、磐梨郡と複雑に変遷したことが知られている。また、町域には古代山陽道が敷設されていたと考えられており、「延喜式」(兵部省)の河磨の駅は、河磨郷に置かれていた可能性が高い。この河磨駅については、「河磨」の遺跡地である可真上・可真下のあたりに所在したとする説があるが、近年、松木に比定する説もある(小橋a・b 1994)。この地区から古代瓦が出土したことなどが大きな根拠であるが、駅家の比定にはまだ数多くの課題を抱えている。

このように、畠古墳の所在する地区は、古くから交通の要所であり、それに伴って政治的、経済的にも重要な地域であったことが分かる。

註

(1) 藤原京跡から「備前国河磨郡」と記された木簡が出土している(木簡学会『木簡研究』1991)。



1 畠古墳	9 土井谷2号墳	16 麗雲寺遺跡・慶雲寺跡	24 小丸山古墳
2 二井大池2号墳	10 土井谷3号墳	17 谷の前遺跡・谷の前古墓	25 古上古墳
3 大谷寺跡	11 土井谷4号墳	18 塚本寺古墳	26 姫木路古墳群
4 種田古墳群・種田道路	12 上の段古墳	19 弥LA遺跡	27 弥古墳
5 前内池古墳群・前内池道路	13 小山古墳	20 弥上B遺跡	28 細網古墳
6 土井道路	14 可真上A遺跡	21 弥上C遺跡	29 銀治屋A敷地
7 八つ塙古墳群	15 駿田神社裏古墳群・駿田神社遺跡	22 坪の山1号墳	30 天上山遺跡
8 土井谷1号墳		23 坪の山2号墳	

図1 畠古墳の位置と周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

第2章 測量調査に至る経緯

畠古墳は、古くから地元で知られていたとみられ、昭和15年刊行の『改修赤磐都誌』にもその記述がある。しかし、古墳の大きさを示す封土の欄は空欄となっていることから、すでに墳丘盛土の大部分が失われていたものと思われる。畠古墳は、かつて岡山大学考古学研究室により発掘調査がなされ、奥壁近くに1号陶棺、その後方に2号陶棺、玄門入口近くに3号陶棺があったとされる（杉山1987）。なかでも1号陶棺は波状文や竹管文などで装飾されており、県内の亀甲形陶棺でも古い段階に位置付けられ、編年上重要な資料となっている（杉山1987、宮岡2012）。

平成25年7月、豪雨などで墳丘の土砂や石材が隣接する民家に流入する恐れが生じ、その対策について土地所有者から相談を受けた。これを受け赤磐市教育委員会は、古墳の取扱いについて土地所有者ならびに県文化財課と協議を行った。土砂流出の要因は、これまで古墳を覆っていた竹林を除伐したことによると考えられた。そこで、墳丘上面に草木による表面保護をほどこすとともに、前面に土砂流出防止のため、古墳に大きな影響を与えない範囲で擁壁を建設することになった。また、石室石材が露出している墳丘背面側にも土養を積み、石室の保護を実施した。なお、畠古墳の墳丘や石室については、これまで測量調査が行われていなかったことから、あわせて現状の記録を作成することになった。

擁壁の建設は、平成25年7月に行われ、赤磐市教育委員会職員が立会した。平成26年3月には赤磐市文化財保護委員会の視察を行い、専門的な事項について指導を得た。墳丘の測量調査、石室の実測、写真撮影は平成26年4月から5月までの、延べ12日間かけて行った。

表1 文化財保護法に基づく提出書類

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

岡山県文書 番号・日付	遺跡の種類 及び名称	所在地	面積m ²	目的	届出者	期間	主な指導事項
教文理 第479号 H25.7.5	古墳 畠古墳	赤磐市弥上322	8m ²	その他開発（法面保護）	個人	H25.7.7～ H25.7.10	工事立会



写真1 横穴式石室入口（西から）



写真2 墳丘の残存状況（東から）

第3章 測量調査の成果

1 古墳の概要

畠古墳は、東から西に延びる緩やかな丘陵上に位置する。周辺よりも一段高い場所にあり、周囲を見渡すことができる。古墳は開墾や削平により石室とその周辺の径10mほどの墳丘盛土を残すのみとなっている。よって、墳丘本来の形状を復元することは困難であるが、周辺の状況などから径15mほどの円墳と想定しておきたい。

横穴式石室は入口から奥に向かって右に袖をもつ片袖式の横穴式石室（以下、右片袖式石室）である。羨道の一部が失われている可能性があるが、石室の残存長9.00m、玄室長4.82m、玄室奥壁幅1.84m、羨道残存長4.18m、羨道入口幅1.63mを測る。

築造された時期は、石室の形態や出土陶棺の特徴、周辺の古墳との比較から古墳時代後期後半ごろと考えられる。

2 墳丘(図2)

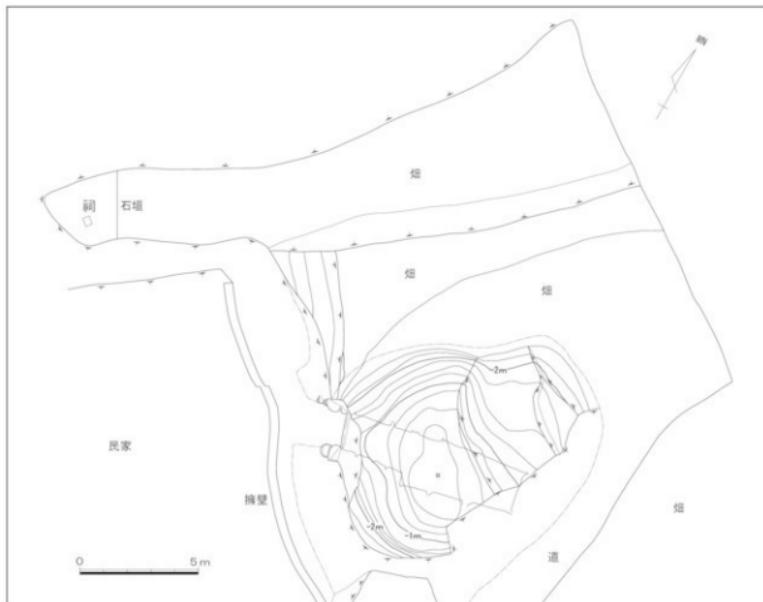


図2 墳丘測量図 (1/200) (高さは墳頂部を0 mとする)

数年前まで畠古墳の墳丘は竹林に覆われていたが、除伐により木竹が取り除かれ、残存する墳丘があらわとなつた。墳丘の南西から南側にかけては宅地造成により以前から大規模な削平を受けており、古墳の前面は崖面となっている。その他の部分も田畠に開墾され、全体としてかなりの改変を受けている。墳丘から西側18mほどの場所に祠堂が存在しており、わずかに旧地形を反映している。

現状では畠古墳は石室を中心とする径9~10m、高さ約2.5mを残すのみとなっている。東側は隣接する農道によりえぐられ、ここでは石室の裏込石材が露出している。

石室前面の崖面ではこの丘陵の地山である花崗岩の岩盤が露出している。このことから、畠古墳はこの岩盤上に築造されたことが分かる。一方、墳丘盛土は砂質土で乾燥すると崩落が進みやすい性質のものである。盛土については詳細な断面観察を行えていない状況ではあるが、いわゆる互層状の断面などは確認できていない。石室近くの崖面で陶棺片が露出していることから、墳丘は見かけ以上に削平されている可能性も考えられる。

このように、畠古墳は石室を残してほとんどが削平を受けており、築造当初の状況が分かれる部分は現地表にはほとんどないといってよい。畠古墳の墳形を推定するための十分な根拠を示すことはできないが、現段階では石室を中心とした径約15mの円墳に復元しておきたい。

3 横穴式石室（図3~4）

畠古墳の石室は西方向に開口する右片袖式石室である。羨道部入口付近は一部失われているが、各主要石材に加え、石材の間に詰められた小石も良く残っており、保存状態は良い。本来の全長は不明であるが、石室内の奥壁から羨道入口までの残存長は9.00mを測る。

玄室は、長さ4.82m、幅は奥壁側で1.84m、玄門側で2.15mを測り、奥壁側がやや狭く、玄門に近いほど幅が広くなっている。高さは2.25mで、天井石3枚が架構されている。奥壁は幅1.8m以上、高さ1.8m以上の平石を立てかけ、その上に2段に石材を積み上げて構築されている。奥壁はほぼ垂直に立てかけられているが、上の2枚の石材は中央に向かって持ち送りされている。側壁は左右とも下段に3枚の石材（腰石）を使用している。これらの腰石は奥壁に近いほど大きなものを使う傾向がみられ、玄門に近いものはほど小さくなっている。石材は奥壁側の大きなもので幅2.2m以上、高さ1.35m以上を測る。これらの腰石を左右3枚設置したのちに、最も高い奥壁側の頂部と高さを合わせるように石材を積み上げ、高さ-3.35m付近で一度水平に調整している（ここまでを1段目）。1段目から上面も、-3m付近（ここまでを2段目）と天井石下部の-2.5m付近（ここまでを3段目）に石室構築過程の区切りである横目地を確認できる。このように両側壁とともにおおむね3段階の工程が確認できるが、右側壁は、2段目と3段目にまたがる石材が一部存在する。なお、左右の側壁を比較すると、2段目から3段目の石材は右側壁のほうが左側壁よりもやや大きい傾向にある。側壁は左右ともに内傾気味に構築されており、その角度の平均はおおむね85度を測る。天井には3枚の大形石材が使用され、天井石の下面はほぼ水平に架構されている。側壁と天井石の間には、天井石の設置位置を調節するための小さな石材が数多く使用されている。

羨道は長さ4.18mが残存している。幅は玄門付近で約1.7m、入口付近でやや狭くなり1.6mを測る。高さは玄門付近で約1.8mを測る。天井石は3枚が残存しており、玄室の天井石に比べると一回り小さい。側壁の下半部は大きな石材を使用しているが、右側壁は石材の面積の広い面を羨道側に向けて

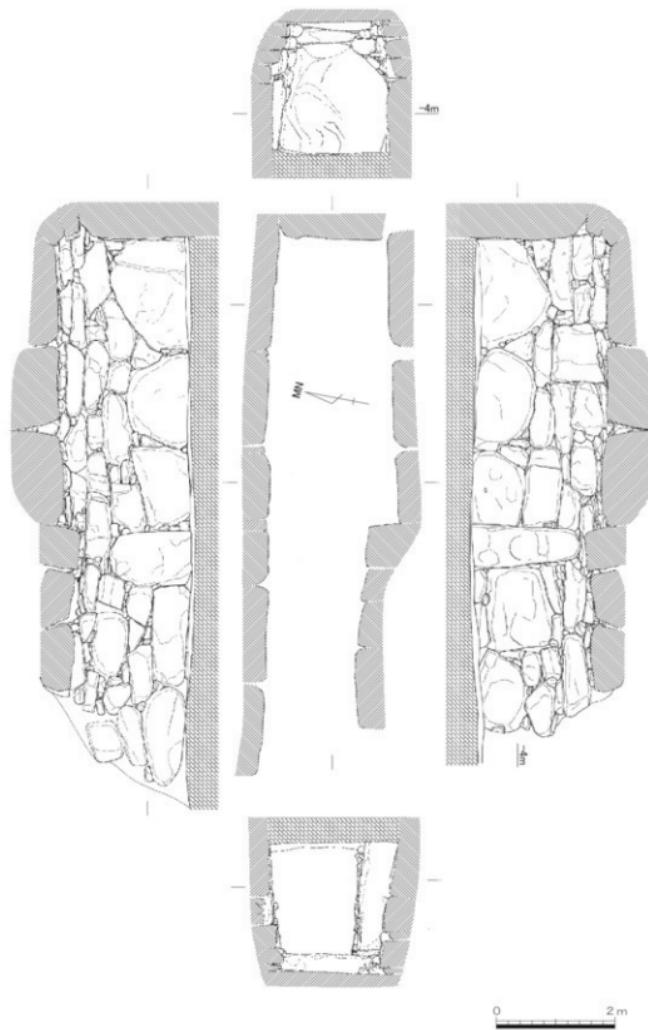


図3 横穴式石室平面図 (1/80)

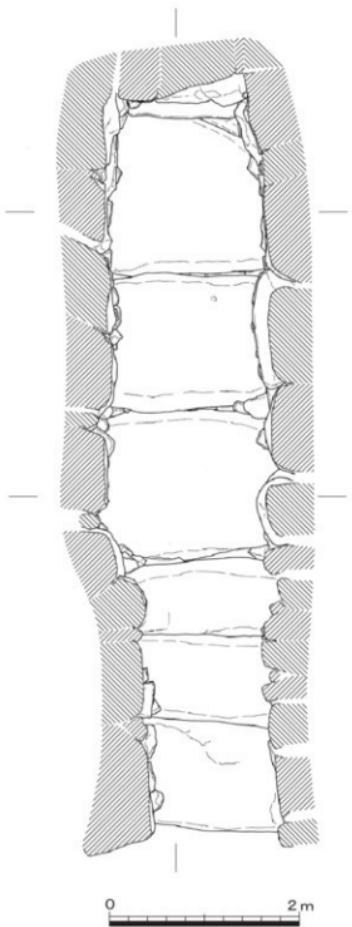


図4 石室天井見上げ図 (1/50)

いるのに対し、左側壁は直方体に近い石材を横に寝かせて設置しているようであり、左右で石材の使用方法に差がある。側壁にも、構築過程を示す目地がいくつかみられる。右側壁は幅約1.4m、高さ約1.2mほどの大形石材が使用されており、その上面 -3.2mと天井下部あたり -2.7mに石材の目地が観察できる。一方、左側壁は右側壁のような大きな石材はみられないが、下段から順次石材を積み上げ、-4m、-3.6mあたりと天井石下部 -2.8m付近に目地を確認することができる。玄室の構築段階を示す目地は左右の側壁で比較的そろうのに対し、羨道では天井下部の目地を除き、その高さはそろわない。羨道本来の長さは不明であるが、天井石がもう一石残存していたと考えると、羨道の長さは約5mになる。

玄室と羨道の境にあたる玄門部であるが、天井には樋石が存在する。樋石の底面は玄室の天井からは30cmほど垂下しているが、羨道の天井石とは下面が若干下がっている程度であり、その高さの差はわずかである。右袖部の玄門に立てかけられている柱状の立石(袖石)の高さは1.8mを測り、床面からほぼ玄門天井部まで一石である。一方、袖石が対面する左側壁側には袖石より一段低い高さ約1.4mの石材が存在し、羨道部と玄室を区画している。

使用されている大形石材はすべて花崗岩である。石材の間に詰められている石材も大部分が花崗岩であるが、わずかに異なる石材もみられる。石材の大部分は自然石であるが、なかには分割したような石材も確認できる。石材のなかには、自然のものにしては不自然な窪みもみられ、加工痕跡と考えられる部分もあるが、推定の域を出ない。

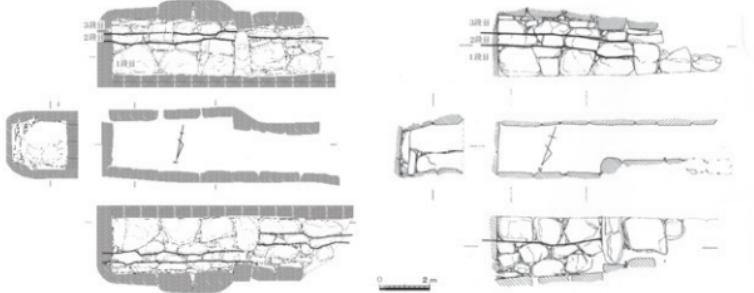
第4章　まとめ

1 横穴式石室の特徴と築造時期

畠古墳は、墳丘の残りは必ずしも良くないが、円墳であれば径約15mの規模が想定される。その一方で、横穴式石室の残存状況は比較的良好で残存長9m、玄室長4.82m、玄室奥壁幅1.84m、羨道残存長4.18mを測る。羨道が本来もう少し存在していたと仮定すると、横穴式石室の規模は約10mとなる。ここでは、畠古墳と同じ弥上地区に所在する弥上古墳（山磨1986）と比較検討することで、その特徴や築造時期を明らかにしたい。

弥上古墳は畠古墳から南へ約600m、標高約110mの山塊上に造られた古墳である。1976年に発掘調査がなされ、前方部の発達した全長約30mの前方後円墳であることが判明した。横穴式石室は畠古墳と同様に西方向に開口しており、現存長9mを測る。玄室には土師質亀甲形陶棺や木棺が納められていた。

この弥上古墳と畠古墳の横穴式石室実測図と各部寸法を図5に掲載した。これによると石室形態は、畠古墳は右片袖式であるのに対し、弥上古墳は左片袖式で左右が逆になっている。各部寸法であるが、玄室の長さは畠古墳の方が70cmほど大きくなっているが、その他の玄室の幅、高さ、羨道の幅や高さは似通った数値を示している。奥壁はともに一枚化への志向が認められるが、奥壁の平石は畠古墳のはうが大きい。天井石はともに3枚で、玄室腰石もともに3枚である。また、天井までのびる袖石の存在も共通している。側壁については畠古墳では左右3段の構築過程が見られたが、弥上古墳でも同様の構築過程が見られる。ただし、弥上古墳の特に左側壁については畠古墳ほど明瞭な目地は認められず、構



	残存長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道幅	羨道高
畠古墳	9.0	4.82	1.84	2.25	1.51	1.87
弥上古墳	9	4.1	1.9	2.3	1.4	1.7

単位m

図5 畠古墳（左）と弥上古墳の横穴式石室の比較

築過程の段数とすれば少ないと考えられる。使用されている石材は、奥壁や玄室腰石は全体的に烟古墳のほうが大きいが、側壁上半部は特に左側壁については弥上古墳のほうが大きい傾向がある。

弥上地区を含む旧熊山町域あるいは赤磐市域においては、近年の発掘調査成果をふまえた横穴式石室の研究がすんでいる（尾上2009、 笹栗2010a）。吉備地方の横穴式石室の新旧を考える指標として笹栗拓は奥壁・側壁石材の大型化・段数の減少と平滑化、棺石の形骸化・消失、7世紀初頭までは玄室が長大化する傾向があることを指摘しているが（ 笹栗2010b）、これらの指標をもとに烟古墳と弥上古墳を比較した場合、棺石の形骸化という視点では両古墳とも類似しているが、玄室の長大化、奥壁石材の大形化という点では烟古墳に新しい要素が見受けられる。しかし、段数の減少という点では、弥上古墳のほうが新しい様相がみられる。しかし、両者をくらべると互いに差異は認められるものの、全体的に共通点も多く、両横穴式石室の時間差はさほど大きなものでないと考えることができよう。

弥上古墳は、正式な報告書が刊行されていないが、須恵器の編年観ではTK43～209型式を中心とする時期に營まれたと考えられている。笹栗は袖のない左側壁の玄門付近の石材が縱方向に据えられていることから、烟古墳の横穴式石室について、畿内の両袖式横穴式石室出現以降とするのが妥当とし、TK43型式ではないかとしている（ 笹栗2010a）。烟古墳から出土した遺物の報告事例は少ないが、陶棺などの年代もこのころに考えることができ（横田2003）、烟古墳の石室はTK43型式併行期に築造されたと考えることができよう。

2 烟古墳の意義

烟古墳を含む弥上・可真地区は、6世紀になると有力首長層の横穴式石室墳が築造されることで、県内でも注目すべき地域である。そして、この地域の横穴式石室の形態については、弥上古墳や烟古墳および婦本路2号墳も含め、羨道幅が玄室幅に対して広い点や前壁が1段でかつ低い点などを特徴とした小地域性が指摘されている（ 笹栗2010a）。このような地域性は、横穴式石室に納められている陶棺にもいえ、烟古墳および弥上古墳の陶棺はともに県内の陶棺のなかでも古い要素をもつ上に、偏在的にこの地域で出現している。

このように、古墳時代後期においてこの地域の独自性がどうして生まれたのか、そしてそれは何に起因するのかなどの課題を解明していくことは、この地域のみならず吉備地方全体の歴史像を明らかにしていくことにつながるものと考えられる。

参考文献

- 荒木誠一 1940 「改修赤磐郡誌」赤磐郡教育会
尾上元規 2009 「横穴式石室の系譜」「八塚古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告218 岡山県教育委員会
小橋国弘 a 1994 「東備地域の都城の変遷と河原郷」「熊山町史 通史編」熊山町
小橋国弘 b 1994 「山陽道と河原駅」「熊山町史 通史編」熊山町
笹栗拓 2010 a 「可真・弥上地区における婦本路古墳群の位置づけ」「婦本路古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告225 岡山県教育委員会
笹栗拓 2010 b 「横穴式石室の展開過程と地域社会の構造－吉備の分析を中心に－」「古代学研究」第188号 古代学研究会
柴田美樹ほか 2010 「婦本路古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告225 岡山県教育委員会
杉山尚人 1987 「陶棺の研究」「考古学研究」第33巻第4号 考古学研究会

- 高畠知功・光永真一 1987 「丸崎古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告』17 岡山県教育委員会
- 内藤善史ほか 2003 「前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174 岡山県教育委員会
- 平井泰男・山崎康平ほか 2009 「鍛冶屋D遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告219 岡山県教育委員会
- 岡壁良子 2003 「可真・河磨・かま」「新世紀の考古学」大塚初重先生喜寿記念論文集
- 宮岡昌宣 2012 「陶棺からみる畿内と吉備」『考古学研究』第59巻第1号 考古学研究会
- 柳瀬昭彦・下澤公明ほか 2004 「八ヶ奥遺跡・八ヶ奥製鉄遺跡・岡遺跡・小坂古墳群・才地古墳群・才地遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告178 岡山県教育委員会
- 山崎康平・浅倉秀昭・重根弘和ほか 2005 「土井遺跡・谷の前遺跡・慶運寺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告191 岡山県教育委員会
- 山崎康平 1986 「弥上古墳」『岡山県史 第18巻 考古資料』岡山県
- 横田美香 2003 「吉備地域の土師質亀甲形陶棺」「古代吉備」第24集 古代吉備研究会

報告書抄録

ふりがな	はたこふん							
書名	烟古墳							
副書名								
卷次								
シリーズ名	赤磐市文化財調査報告							
シリーズ番号	9							
編著者名	金田善敬							
編集機関	岡山県赤磐市教育委員会							
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐市下市337 TEL086-955-0710 FAX086-955-0758							
発行機関	岡山県赤磐市教育委員会							
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐市下市337 TEL086-955-0710 FAX086-955-0758							
発行年月日	2016年3月10日							
ふりがな 所収遺跡	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
	市町村	遺跡番号						
はた 煙 古 墳	岡山県赤磐市跡上 322番地ほか	33213	333240207	34°46'50"	134°3'24"	20140409 ～ 20140530	—	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
烟古墳	古墳	古墳時代	古墳1基			測量調査		
要約	烟古墳は横穴式石室をもつ古墳である。墳丘の残存状況は良くないが、径15mほどの円墳と想定できる。横穴式石室は片袖式で残存長9m、玄室長4.82m、玄室奥壁幅1.84m、羨道残存長4.18mを測る。烟古墳は石室内から陶棺も出土しており、この地域の有力者を埋葬した古墳と考えられる。							



1. 烟古墳遠景（西から）



2. 烟古墳全景（北西から）



3. 横穴式石室玄室（西から）

図版2



1. 横穴式石室奥壁
(西から)



2. 横穴式石室玄室
天井石 (東から)



3. 横穴式石室玄門付近
天井石 (東から)



1. 横穴式石室玄門付近
(東から)



2. 横穴式石室
左側壁 (西から)



3. 横穴式石室
右側壁 (西から)

図版 4



1. 横穴式石室袖石
(東から)



2. 横穴式石室羨道
左側壁 (西から)



3. 横穴式石室入口付近
(西から)

赤磐市文化財調査報告 第9集

畠 古 墳

平成28年3月5日 印刷

平成28年3月10日 発行

編集・発行 岡山県赤磐市教育委員会
岡山県赤磐市下市337

印 刷 山陽印刷株式会社
岡山県岡山市北区富吉3098-1
